

This Page Is Inserted by IFW Operations  
and is not a part of the Official Record

## **BEST AVAILABLE IMAGES**

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

**IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.**

**As rescanning documents *will not* correct images,  
please do not report the images to the  
Image Problem Mailbox.**



10/701.194

12.22.02

公開実用 昭和57— 200703



実用新案登録願

昭和56年6月18日

特許庁長官 鳥田春樹殿

1. 考案の名称

\*ジソウチ  
ロッドの保持装置

2. 考案者

フリガナ 住 所 神奈川県茅ヶ崎市松尾8-15

氏名 中間 大二

3. 実用新案登録出願人

フリガナ 住 所 神奈川県横浜市戸塚区舞岡町184番地1

氏名(名称) 株式会社ニフコ

代表者 小笠原 敏晶  
(国籍)

4. 代理人 〒105

住 所 東京都港区愛宕一丁目6番8号  
愛宕小西ビル403号  
電話 436-1288

氏名 (7028)弁理士 中山伸治



5. 添付書類の目録

(1) 明細書 1通  
(3) 願書副本 1通

(2) 図面 1通  
(4) 委任状 1通 23

方式  
審査



56 083709

200703

— 1 —

明細書

1. 考案の名称

ロッドの保持装置

2. 實用新案登録請求の範囲

保持体と、保持体を固定するパネルがあり、  
保持体は基板と、基板の上面に沿って前後方向  
にロッドを保持する保持部と、基板の下面から  
垂設され脚端に前後に突き出す一对の係止片を  
備えた略T字状をなす係止脚と、該係止脚を挟  
んで前後に対向する如く設けられる舌状のバネ  
片を有し、他方前記パネルには長孔を開設し、  
該パネルの長孔に前記保持体の係止脚を挿通し  
て脚端の係止片を突き通し、その後この係止脚  
を中心に基板を回転させて上記保持片の上面を  
上記長孔の縁に係止させると同時に前記バネ片  
をパネルの上面に当接し基板を浮き上り状に固  
定し、上記係止片の長孔に対する保証点を支点  
に保持体を描動可能にしたことと特徴とするロ  
ッドの保持装置。

200103  
24

公開実用 昭和57— 200703

—2—

### 3. 考案の詳細な説明

本考案は、パネル面に沿って長尺なロッドの両端を止め付けるような場合、例えば自動車のトランクルーム内にクラシックシャフトやジャッキの回転シャフト等を格納する場合にその端部を止め付けるのに有効な保持装置に関するものである。

一般に、クラシックシャフトやジャッキの回転シャフト類を格納する場合、シャフトの両端をパネルに植設する保持具に把持させ、移動しない様に固定するが、この様なシャフト類は鋼棒が使用されそれ自体融通性がないため、上述の様に二点で保持するとき双方の保持具の向きがシャフトの長さ方向の向きと一致しない場合にはそのいずれか一方の保持具に対する収まりが悪くなり、安定した固定が得られず、又車体の振動等によって脱れることがある。

本考案は、この様な点に鑑み考案されたもので、上述の様にシャフト類の如く長尺なロッドを両端の二点で把持する場合等において、その

一方の保持に融通性をもたせ、例えば両保持具の取付位置に誤差を生じてもこの誤差、狂い分を吸収して常に安定した状態で保持できるようになしたロッドの保持装置を提供せんとするものである。

以下、本考案を図示する一例に従つて説明し、その特徴とするところを詳述すると、第1図は本考案装置の一部欠載せる斜視図で、1はプラスチックを材料として成形される保持体を示し、2はこの保持体を固定するためのバネルを示す。

ここに示す保持体1は長方形状の所接板厚を有した基板3を主体にしてその上面にロッド4を保持する保持部5と摘み片6を、下面に係止脚7とバネ片8、8を備えている。

保持部5は前後方向に長さを有する基板3の前方側の上面にあって断面H字形に形成しており、左右に対向して起立するバネ性を有した壁5a、5a間にロッド4を押込むことによつてこのロッドを基板の上面に長さ方向に沿つて抱持できるようにしてある。そして、摘み片6は

公開実用 昭和57— 200703

-4-

基板の両端に沿って起立し、上記保持部5に抱持されるロッド4をこの間に通せるようにしてある。尚、この摘み片は保持体をパネル2に固定するとき使用されるもので、これについては後述する。

一方、基板3の下面に設けられる係止脚7は下面の中央部から垂れ下り、脚端に前後方向に突き出す係止片9，9を備えてT字形に形成しており、また、バネ片8，8はこの係止脚7を中心前に前後対称形に設けてある。

上記係止脚7はパネル2の板厚より長く形成し、その脚端に設けられる係止片9，9の上面y<sub>a</sub>，9<sub>a</sub>は先端に向けて勾配が付けてある。そして、2つのバネ片8，8はこの係止片9，9の上方に歸む如く基板3の下面から突き出し、各々の先端と係止片の上面y<sub>a</sub>，9<sub>a</sub>とが対向するようにしてあり、その各先端の下面には係止突起10，10が設けてある。

上記バネ片8，8は後述する様に保持体1をパネルに固定したときパネルの上面から保持体

を浮き上り状に支えるもので、所要の反発力が付与されると共に、前記保持脚7の保持片9との間にパネルの板厚より小さな間隔が設けられるよう突出してある。

尚、図示する実施例では基板3の一部を切欠いて空部11を形成し、この空部に接する橋12の下面から保持脚7を貫通してあるが、この空部はパネル8、8を形成する成形型の型抜き用の空部であって、上記橋12は実質的に基板3の一部である。勿論、ここに形成される空部11は成形型の設計によって全く不要のものとなることは首うまでもない。

一方、上記構成される保持体1に対してパネル2には前記保持脚7を保持するための孔13が開設される。

この孔13は略T字形をなす保持脚7を垂直に突き通せるように長孔に形成しており、更にこの実施例においては該長孔13の中央部から直角方向に保持片9の幅より狭い切削部14を設けて略十字形をなすようにしてある。

公開実用 昭和57— 200703

— 6 —

次に、上記の如く構成された本考案装置の使用の実験につき説明すると、先ず第1図に示した如くパネル2の上方からこれに開設する長孔13に保持体1の係止脚7を嵌ませて突き入れ、その脚端に設けた係止片9：9をパネルの下面に突き抜かせる。このとき、基板3の下面から突き出すバネ片8，8がパネル2の上面に当接するが、これに抗してバネ片8，8を嵌ませながら係止脚7を押込み、脚端に設けた係止片9，9が長孔から抜け出たところで、次にこの保持体を90°回転させ係止片の上面9a，9aを長孔13の端に係止させる。尚、前記摘み片6，6はこの保持体の回転のとき指を掛ける摘みとなるもので、バネ片の反発に抗して回転させるのに有利である。

この様にして保持体1を回転すると、係止片9，9の係止と同時にパネルの上面を滑って回転するバネ片8，8が反発力を貯えたまゝ切削り14の上に回り込み、その下面に突設した突起10，10をそれぞれの切削りに突入れるため保持

- 7 -

体は自動的に回転を停止する。そして、回転を止めた保持体は係止片 9, 9 の係止によって係止脚 7 の引き抜きが阻止されると同時に、バネ片 8, 8 の反発力によって押上げられるためパネルの上面から浮き上った状態で固定されることになる。

第 3 図は上記保持体をパネル 2 に固定した状態を示したもので、この保持体の固定後基板 3 の上面に設けた保持部 5 にロッド 4 の一端を刺込ませ、左右の壁 5a, 5a の挟み付けによつてこれを保持させるのである。

従つて、本考案装置によれば、パネルに対し保持体 1 はその係止脚 7 を挿入し、次に回転させることで固定ができると共に、常態においてはバネ片 8 の反発力でパネルから浮き上った状態で安定するため、保持部 5 に受けたロッドをパネル面に並行した状態で拘持できる（第 3 図参照）一方、バネ片 8, 8 は弾力性を有し、又係止脚 7 は係止片 9, 9 の上面を長孔 13 の縁に係止して引き抜きが阻止されていることから、

公開実用 昭和57— 200703

- 8 -

パネル面に対してロッド4が傾斜した場合には、第4，5図に示した様に一方のパネル片8を奥に寄せ、且つ一方の係止片9を係止させて前後いずれの方向にも基板3を傾けることができるため、ロッド4の傾斜に逆うことなく保持部5にロッドを保持しておくことができる。

従って、前述した様に長尺なロッドを二箇所で保持するような場合において、二箇所の保持部の向きと、ロッドの長さ方向の間に狂いが出ても、保持体が係止脚の係止片と長孔の係止点を支点に運動してこの狂を吸収することから常に保持部に対してロッドを安定した状態で保持させることができることになる。

なお、前記実施例において、保持部5を断面U字形に形成してロッド4を二つの壁5a，5bで挟持する構造のものとしたが、これはロッドの保持を着脱容易にするためで、特にこの構造に限定されるものではなく、例えば断面形状を鉤形にして開口する側方からロッドを割り込ませるようにしてよい。

- 9 -

また、係止脚に設ける係止片9, 9の上面を傾斜面としたが、この傾斜面は基板3ひいては保持体1の運動、つまり傾きを円滑に誘導するためのもので、更にはこれを弧状面にしても同効である。

#### 4. 図面の簡単な説明

図面は本考案の一実施例を示したもので、第1図は一部欠截せる斜視図、第2図は上図Ⅰ-Ⅱ線断面図、第3, 4, 5図は使用状態を示す説明図である。

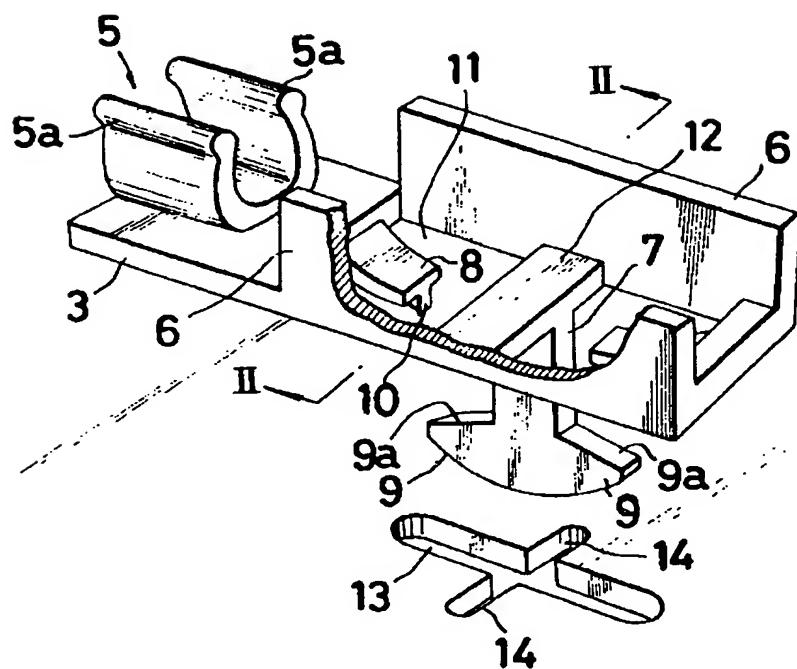
1は保持体、2はパネル、3は基板、4はコード、5は保持部、7は係止脚、8はパネル片、9は係止片、13は長孔である。

实用新案登録出願人 株式会社ニフコ

同上代理人 弁理士中山伸治

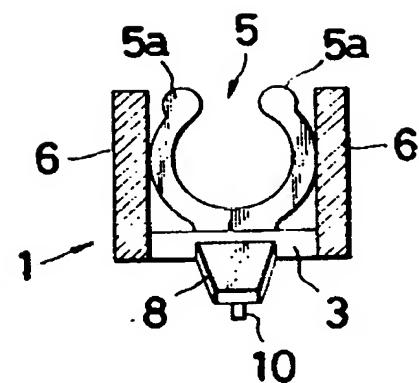
公開実用 昭和57— 200703

第一図

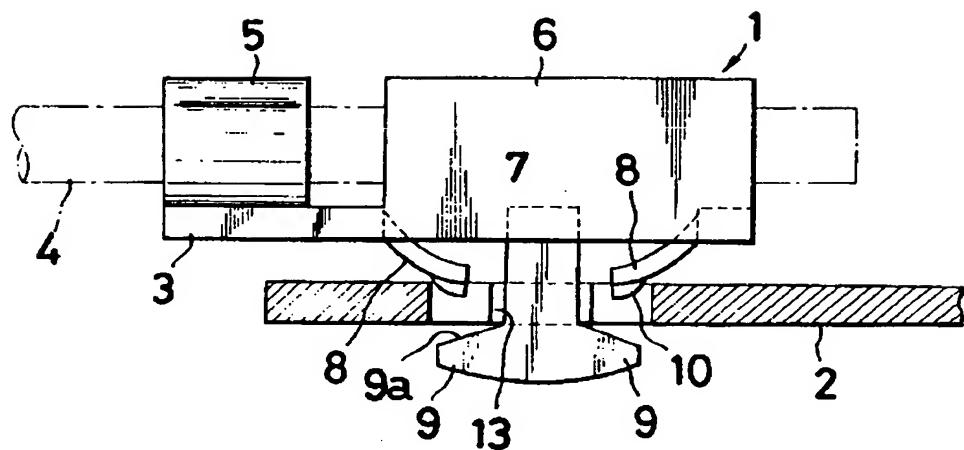


200703/3

## 第 2 図



## 第 3 図



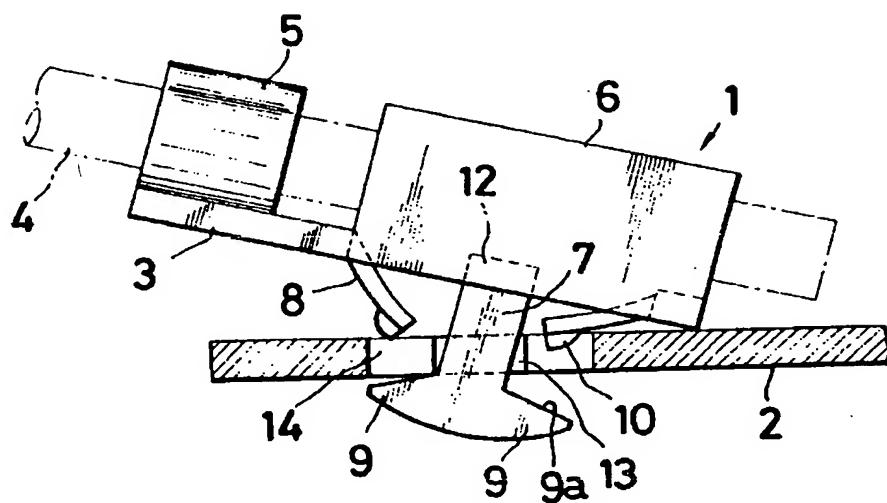
200 32/3

代理人弁理士 中山伸治

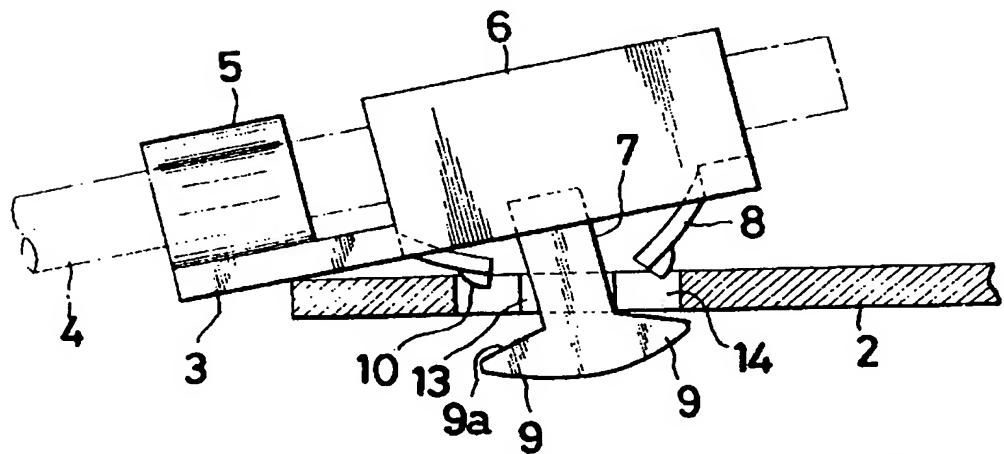


公開実用 昭和57— 200703

第 4 図



第 5 図



代理人弁理士 中山伸治

35

